悦楽

勝目梓

院图书馆

祥伝社

長編小説 悦楽

平成2年6月20日　初版第1刷発行
平成2年8月20日　　第4刷発行

著　者　勝目梓（かつめ あずさ）
発行者　伊賀弘三良
発行所　祥伝社（しょうでんしゃ）
〒101　東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九段尚学ビル
☎ 03 (265) 2081(営業)
☎ 03 (265) 2080(編集)
印　刷　萩原印刷
製　本　ナショナル製本

万一、落丁・乱丁がありました節は、お取りかえします。
Printed in Japan.
ISBN4-396-63015-8 C0093
© Azusa Katsume, 1990

悦

楽

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

一章 …… 5
二章 …… 51
三章 …… 102
四章 …… 149

装幀　中原達治

一章

そのとき自分のしたことを振り返ると、今でも私は信じられない思いに包まれる。

私はしかし、心にないことをしでかしたわけではない。あれは自分が望んでしたことだった。一年余りが過ぎた今は、それが私にははっきりわかる。そして、すべてはそこから始まった。

たしかに私は酒に酔っていた。会社の部下たちと飲んだだけだったから、それほど深酔いしていたわけではない。

一人になりたくて、私は部下たちには家に帰ると嘘をついて別れてから、道玄坂を歩いていた。行く先のあてはなかった。誰とも口をきかずにすむ店で、もう少し酔いたいと思っていた。

その頃も、そのずっと以前も、いつでも私は一人になりたがっていた。人と口をきくのが億劫でならなかった。一人でいることを望む理由には事欠かなかった。理由がなくても、誰かと一緒にいると疲れた。疲れて首すじや肩や背中が、膠を塗りこめたようにこわばった。

そのときも、私の肩や首すじは重くなっていたはずだ。気がつくと、私は小声で独り言を呟い

ていた。呟きは自分の耳にもはっきりは聴きとれなかった。私は耳を澄ませた。
〈カイラク、カイラク、ミツノアジ……〉
快楽、快楽、蜜の味――私はそういうことを呟いていた。
酔っている頭のどこからそうした呟きがこぼれ出てきたのか、自分でもよくわからなかった。一人で街を歩いている今の状態が、蜜の味のような快楽だと自分が思っているのか、あるいは自分がそれとは別に、蜜の味の如き快楽を求めているということなのか――。
私は自問し、即座に答えをつかんだ。私は蜜の味のような快楽を求めていたのだ。それも、酔って一人になった今現在それが欲しいというのではなかった。私が求めていたのは、快楽が約束された人生、蜜の如き味わいと輝きに彩られた日々、といったものだった。
〈カイラク、カイラク、ミツノアジ……〉
私は今度ははっきりと意識して、同じ呟きを小声でくり返しながら、うつむけていた重い首を起こし、胸を張って歩いた。
クリスマスを数日後に控えた週末の夜だった。渋谷の街はイルミネーションで輝き、人が溢れていた。私は光彩の中に自分を溶けこませたかった。自分でも信じ難いことが、そのとき起きていた。私は行き交う若い女性たちに向かって、誰彼なく声をかけはじめていたのだ。
「ボクノケイヤクアイジンニナッテクダサルツモリハアリマセンカ？」
ぼくの契約愛人になってくださるつもりはありませんか――そのことばは、相手の耳には呪文のように聴こえたかもしれない。

美人もいた。不美人もいた。蠱惑的な肢体の持主もいたし、そうでないのもいた。表情の柔らかい女もいれば、若い身空で早々と人生を呪っているような眼差しの女もいた。

私は相手に連れがないとわかると、印象の別を問わずに視線を合わせておいて、声をかけた。

反応はさまざまだった。戸惑い。無視。侮蔑。非難。不快。嫌悪。意味不明の笑い。嘲笑——。

「オジサン、アタマ、ダイジョウブ?」

「オウチニカエッテ、ムスメサンニ、ソウイイナサイヨ」

「コトシノカゼハ、ノウニクルノネ」

そういったことばを返してきた女もいた。私はめげなかった。酒の酔いのせいもあっただろう。だが、それ以外の何かが、酔いよりも強く私を駆り立てていた。街に溢れる光が鋭い刃物のように眩しすぎて、人々の雑踏があてどのない黒い流れのように見えた。

電話ボックスが眼についた。私は探していたものが見つかったときのように、足早に寄っていき、ボックスのドアを押した。

私は何かに憑かれていたとしか言いようがない。受話器を取り、カードを挿し入れ、あてずっぽうに番号ボタンを押した。男の声の応答が返ってくると、電話を切った。若くないと思える女の声が返ってきたときも、受話器を持ったままの手の指で、フックを押し下げた。そうやってくり返し、あてずっぽうに電話をかけつづけた。相手が若い女性と思えたときだけ、私は声を送った。

「ボクノケイヤクアイジンニナッテクダサルツモリハアリマセンカ？」
やはり反応はさまざまだった。私は酔ってはいたが、呂律はしっかりしていた。それでも、何を言われたのかわからずに、訊き返してくる者が多かった。言われていることの意味がわかると、たいていの場合は無言のまま電話は切られた。電話の切れる機械的な音に、相手の怒りがこもっていた。中には罵声を返してくる者もいた。明らかに酔っているとわかる相手もいた。酔いがアルコールによるものなのか、薬物の類いなのかは見当はつかないまでも、酔っている相手だということはわかった。そういう相手は、向こうから話をしたがった。私は相手にならずに、電話を切った。
電話を切らずに、私の話の相手をしてくれた女も何人かはいた。突然にかかってきた、わけのわからない電話の主を、ひまつぶしにからかってやろうという意図の見えすいた相手が多かった。そういうのも私はごめんだった。
「本気なんですか？　愛人の話……」
そういう応答をした女がいた。こちらの言っていることを真面目に確かめているロぶりだった。
「酒が入ってはいますが、ぼくは本気です」
「わたしの電話番号はどこでお知りになったんですか？」
「あてずっぽうにかけたら、あなたが出たんです。電話番号を知ってて、愛人になってほしいと頼めるような女性の知合いは、ぼくにはいないんだ。一人もいない」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「当たり前じゃないかしら。愛人の契約を結んでほしいなんてこと頼める女性の知合いを持っている人なんているかしら。契約だなんて……。これ、やっぱりいたずら電話なのね」
「ちがいます。いたずらじゃないんだ」
「どうしてそういう契約を結びたいんですか？」
「蜜のような快楽が欲しいからですよ」
「セックスということ？」
「それだけじゃないな。それが生み出すすべてのもの」
「寂しいんですか？」
「寂しさには馴れた。寂しくない人生なんかないし、寂しさは耐えられると思うんです。しかし、業苦ばかりで快楽のない人生には耐えられない。あなたは人生から快楽を得ていますか？」
「わからないわ。快楽が欲しいとあらためて思ったことはないんです。むしろわたしは、快楽を犠牲にしてでも、寂しさだけは知らずに毎日が送れたらいいのに、と思うの」
「それは、あなたが若いからだな」
「おいくつですか？」
「ぼく？　ぼくは四十九歳です。身長一六八センチ。体重六二キロ。禿げでもデブでもない。容貌には若いときはいささか自信があった。今もそれほど醜くは見えないはずです。職業は広告代理店の営業部長で、年収は一千万とちょっと。保坂謙四郎という者です。もちろん家族がいます」

「それで？」
「就職試験みたいだが、委細面談ということにしたいんですが」
相手は少し笑ったようだった。私は相手の丸味をおびた柔らかいひびきの声にも、短いその笑い声にも、心地のよいものを感じた。
「つまりこれは、愛人募集の電話なのね」
「ちょっとちがうんだが、そのちがいはうまく説明できそうもないので、そうだということにしときます」
「あたし、よくわからないわ」
「何がですか？」
「なぜ契約じゃなきゃいけないんですか？　普通に奥さん以外の女性を愛して、結果的に愛人ができたということになっていけばいいと思うんですけど……」
「ぼくが求めてるのは愛じゃないんだ。蜜の如き快楽なんです」
「それをお金で手に入れようというわけね」
「売ってくれるという人がいれば……」
「愛情のほうは満たされてるんでしょう、お家で。贅沢だわ」
「満たされてなんかいないが、満たしたいとも思わない。愛と快楽の両方が手に入れば、これにしたことはないけれども、愛はなくても快楽は手に入るかもしれないじゃないですか」
「きっと寂しい、寂しい四十九歳なのね」

「あなたは何歳なの？」
「寂しい四十九歳のおじさんに、あたし会ってみたいと思うようになるかもしれないわ。そうなったらどうやって連絡したらいいんですか？」
「電話をください。会社でも自宅でもかまわない」
私は二つの電話番号を相手に告げた。彼女がその番号をメモしたのかどうか、私は念は押さなかった。彼女は告げられた番号を復誦して確認することもしなかった。
おやすみなさい、と私が言い、彼女も同じことを言って、私たちは電話を切った。
電話ボックスを出たとき、私は自分の足が軽くなっていることに気づいた。心までいくらか軽くなっていたかもしれない。
だから私は、あてずっぽうにかけた、それもふざけたいたずらと思われても仕方のない電話に、それだけの応答をつづけてくれた女性がいたということを、まったく意外には思わなかった。自分のしたことを突飛だというふうにも思わなかった。
そのあとで私は、新宿に行き、ホテルのバーでまた飲んだ。そこならば一人きりで飲んでいられそうだったし、そうなった。
契約愛人募集のあてずっぽうの電話をかけること自体が、蜜の如きとは言えないまでも、すでにひとつの快楽であることに、やがて私は思い至った。新宿からは一時間余りかかる自分の家に帰る、終電車の中でのことだった。

五日が過ぎた日の午後の早い時間に、その電話はかかってきた。
私は自分の席にいた。その日は朝から、気の重い、肚立たしい電話を私は何本も受け、自分でもかけていた。
新しく開発されているリゾート地のイメージキャンペーンの仕事の契約で、トラブルが生じていたのだ。トラブルというよりも、クライアントの側の不注意と認識の誤りから生じた問題というべきだった。
その仕事の受注に関わっていた部下は、すでに他の仕事にとりかかっていて、沖縄に出張していた。私は沖縄に何回も電話をかけ、制作部の責任者とかけあい、クライアントと連絡をとり、問題の処理に当たっていた。簡単には解決の目途はつきそうもなかった。
私はワイシャツの腕をまくり、ネクタイをゆるめ、机の上を書類でいっぱいにし、大きな明るい声で電話の相手と話した。それが仕事をしているときのいつもの私の姿だった。私の声の大きさと、笑い声のひびき方は、入社当時から社内ではよく話の種にされてきた。声を押さえようとしても、私にはできなかった。
それがいつからか、意識して努めなければ、大きな声で話ができなくなっていた。いつの頃からそうなったのか、はっきりと覚えてはいない。十年にはなるだろう。その頃から私は酒量が増え、性欲が減退した。しょっちゅう胸やけを起こし、一年のうちに一、二回は胃の不調に見舞われるようになった。それが訪れると、一ヵ月から二ヵ月もつづいた。神経性胃炎という診断だっ

た。
会社の定期の健康診断のたびに、肝臓の精密検査を言い渡されるようにもなった。決定的な事態は免れてきたが、禁煙と節酒の宣告は検査のたびについてまわった。
努めてそうしなければ、大きな声で人と話ができなくなった頃から、私は自分の背中に張りついた、自分自身の影のようなものを意識するようになった。
影のようなものは、重くも湿っぽくもなかった。そいつは邪魔にもならなかった。ただそこに在るといった感じで、腕まくりで仕事をしている私や、クライアントを接待したり、交渉したりしている私や、家の者たちと一緒にいる私を、じっと見ていた。
そしてそいつはいつのまにか、肌になじんだシャツのように、いや、張りとつやを失いはじめている中年の私の肌そのもののように、背中に張りついたままとなっている。
その影のようなものが、背中に張りついたまま、初めて声もなく笑い、その笑いが心地よいさざ波のように私の肌をくすぐった。かかってきた電話の主が、あの女だとわかったときだった。
「営業部長の保坂さんはいらっしゃいますでしょうか？」
丸味のある、よくひびく声だった。その声が光り輝く透明な膜となって、デスクに向かっている私を静かに押し包んだ。
「保坂です。ぼくが……」
「保坂さんなんですね。わたしです。あてずっぽうの電話に出た……」
「わかってます。声ですぐにわかった」

「この前の夜と、保坂さんの声の感じ、ずいぶんちがいますね」
「声が大きいからでしょう」
「別の人かと思いました」
「もともとぼくは大声なんです。大声でばかなことを言うのが好きでね」
「この前の電話のお話は、ばかなことじゃないんでしょう？　声が沈んでたから」
「あれは真面目な話です」
「よかったわ。からかわれてたんだったらどうしようと思いながら、電話をかけたんですよ」
「これは応募の電話なんだね？」
「そのつもりです」
「わかった。ありがとう。今夜はあいてますか？」
「はい」
「七時にホテル・ニューオータニのロビーで会いましょう。場所はわかりますね？」
「知ってます」
「本館のほうの玄関を入って、フロントの前を通り過ぎた左手に、ソファを置いたコーナーがあります。そこにしましょう」
「わたしは白いウールのコートに、ライムグリーンのニットのツーピースを着ていきます。スカーフはやっぱりグリーン系で、いろんな動物の絵がプリントしてあるんです。きっとコートを脱いで、スカーフを肩にかけていると思います」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com